

教頭の小部屋

2021.12.15 ぞの11



働くって…

トライやる・ウィークは兵庫県が全国に先駆けて行った取り組みだ。中学2年生が、職場体験、福祉体験、勤労生産活動など、地域での様々な体験活動を行う。とりわけ職場体験をする生徒が多い。実際に大人が働く職場で、「働く」ことを体験するのだ。しかし、今年度もコロナの影響で、生徒たちは事業所に行くことができず、学校に講師を招き職業体験の講座を受けてもらった。各講座ではその分野のエキスパートが、様々な話や体験活動を行ってくれた。大人が聞いていても面白い内容であった。改めて私たちも「働く」という意味を考えさせられた。生徒たちも自分の未来を思い描き、「働く」ことを考えたようだ。

本校校長が、学校便り13号で、こう書かれていた。

『人の幸福に影響を与える順番は、①健康 ②人間関係 ③自己決定権 ④年収 ⑤学歴、であり、仕事で高収入をすることは、必ずしも幸福に直結するものではない。』。

では「人はなぜ働くのか?」。以前、こんな文章を目にしたことがあった。

狭間中の教室で使われているチョーク。このチョークは、日本理化学工業という会社が作っている。TVや雑誌にも取り上げられる有名な会社だ。その会社の会長大山泰弘さんは、知り合いの法要で隣に座ったご住職に「なぜ人は働くのか?」と疑問を投げかけたそうだ。

ご住職は私の目をまっすぐに見つめながら、こうおっしゃったのです。

「人間の幸せは、物やお金ではありません。人間の究極の幸せは次の四つです。人に愛されること、人にほめられること、人の役に立つこと、そして、人から必要とされること。

愛されること以外の三つの幸せは、働くことによって得られます。人が働こうとするのは、本当の幸せを求める人間の証（あかし）なのです。」

確かにそうだ…。人は働くことによって、人にほめられ、人の役に立ち、人から必要とされるからこそ、生きる喜びを感じることができるのだ。だからこそ、つらくても、しんどくても、必死になって働こうとするのだ。

大山泰弘氏の心に響く言葉より…

人は働くことで得られるその幸せを「やりがい」と言ったりもする。ちなみに「働く」の語源は「傍（はた）を楽にする」ともいわれている。「はた」というのは「周り」とか「そば」という意味。要するに自分の周りの人。自分以外の誰か、家族や一緒に働く仲間やお客様、そういった人たちの負担を軽くしてあげたり、楽にしてあげる、というのが「働く」の意味だ。

働くことは自分を幸せにする。働くことは自分以外の人を幸せにする。このトライやるへの取り組みが、将来のことを考える良い機会になればと思う。



私たちの働く理由

私は、生来の不器用なので、生徒をうまく導いてあげられなかったこともあるし、うまくつながれなかったこともある。教師という仕事をしている自分にブレが生じたとき、毎回のように読み返す文章がある。今まで何度も何度も読み返してきた文章だ。良い機会なので、私たち教師がどんな思いで君たち生徒と接しているのか、知っておいてほしい。

「縁を生かす」

先生が5年生の担任になった時、一人服装が不潔でだらしく、どうしても好きになれない少年がいた。中間記録に先生は少年の悪いところばかりを記入するようになっていた。ある時、少年の一年生の記録が目にとまった。「朗らかで、友達が好きで、人にも親切。勉強も良く出来、将来が楽しみ。」とある。間違いだ。他の子の記録に違いない。先生はそう思った。二年生になると「母親が病気で世話をしなければならず、時々遅刻する。」と書かれていた。三年生では「母親の病気が悪くなり疲れていて、教室で居眠りする。」後半の記録には「母親が死亡。希望を失い、悲しんでいる。」とあり四年生になると「父は生きる意欲を失い、アルコール依存症となり、子供に暴力を振るう。」先生の胸に激しい痛みが走った。ダメと決め付けていた子が突然、悲しみを生き抜いている生身の人間として、自分の前に立ち現れてきたのだ。

放課後、先生は少年に声をかけた。「先生は夕方まで教室で仕事をするから、あなたも勉強していかない？分からないところは教えてあげるから。」少年は初めて笑顔をみせた。

それから毎日、少年は教室の自分の机で予習復習を熱心に続けた。授業で、少年が初めて手を上げたとき、先生に大きな喜びが沸き起こった。少年は自信を持ち始めていた。

クリスマスの午後だった。少年が小さな包みを先生の胸に押し付けてきた。後であけてみると、香水の瓶だった。亡くなったお母さんが使っていた物にちがいない。先生はその一滴をつけ、夕暮れに少年の家を訪ねた。雑然とした部屋で独り本を読んでいた少年は、気がつくやうに飛んできて、先生の胸に顔を埋めて叫んだ。「ああ、お母さんの匂い！今日は素敵なクリスマスだ。」

六年生では少年の担任ではなくなった。卒業の時、先生に少年から一枚のカードが届いた。「先生は僕のお母さんのようです。そして今まで出会った中で一番素晴らしい先生でした。」それから六年、またカードが届いた。「明日は高校の卒業式です。僕は五年生で先生に担当してもらって、とても幸せでした。おかげで奨学金をもらって医学部に進学することが出来ます。」

十年を経て、またカードがきた。そこには先生に出会った事への感謝と父親に叩かれた体験があるから患者の痛みが分かる医者になれると記され、こう締めくくられていた。「僕はよく五年生のときの先生を思い出します。あのまま駄目になってしまう僕を救って下さった先生を神様のように感じます。医者になった僕にとって最高の先生は五年生の時に担任して下さいましたせんせいです。」

そして一年。届いたカードは結婚式の招待状だった。「母の席に座して下さい。」と一行、書きそえられていた。

致知出版社「心に響く小さな5つの物語」より

私たちの仕事は、たくさんの人生に出会う。そして、その人生に影響を与えるような仕事でもある。金八先生が「我々は、人間を作ってるんだ！」と叫んでいたが、私はそんなにおこがましいことが言える自信家でもない。人と人との出会いはご縁であり。私自身もたくさんの生徒、保護者、地域の方、諸先輩方など、たくさんのご縁で成り立っている。この少年が教師との縁に光を見だし、それを頼りに人生を生きたように、君たちにとって私たち教師との縁が宝物となるならば、こんなに素晴らしいことはない。私たち教師との出会いが、あなたたちにとって宝物であるならば、それは同時に、私たちにとっても宝物なのだ。

そんな思いで、私たちは君たちと向き合っている。

